日本新聞製作技術懇話会 広報委員会編集

編集人 辻 裕史 東京都千代田区内幸町 日本プレスセンタービル 8階(〒100-0011) 電話(03)3503-3829 FAX(03)3503-3828 http://www.conpt.jp



CONFERENCE FOR NEWSPAPER PRODUCTION TECHNIQUE JAPAN

VOL.35 No.3 2011.7.1 (通巻 208 号)

日本新聞製作技術懇話会会 報(隔月刊) (禁転載)



#### 目次

CONPT-TOURの見序	近	日本新聞協会	技術コンサ	ルタント	三宅	順	•••••	3
PRINT CHINA2011	見聞録							
有限会社メデ	ディアテクノス 亻	代表取締役(日本印刷	技術協会客員	員研究員)	井上	秋男		5
新局長に就任して		河北新	新報社 シス	テム局長	草刈	順		8
		信濃铂	毎日新聞社 :	技術局長	長田	実		9
楽事万歳		方	京都新聞社	印刷局長	坂井	重弥		10
㈱インテック NSG事業部メディ	アソリューション	ンセンターメディアソリ	リューション	営業部長	林	克美		11
会員社リポート	ボッシュ・	レックスロス(株)、NEC	; エンジニア	リング(株)		•••••		12
	=	ミューラー・マルティニ	ニジャパン(株)	、方正㈱				13
第37回定時総会開く								
CONPT日誌他 ·········			••••••	•••••	•••••	•••••	•••••	14
●表紙写真提供:CONPT TOUR: 中日新聞社 三盃 賢一郎氏「! ●表紙製版:㈱デイリースポーツ!	シャルロッテンフプレスセンター	ブルク宮殿」						
●組版・印刷:(株)デイリースポー?	ツブレスヤンター	_						

## = CONPTツアー2011のご案内 =

日本新聞製作技術懇話会は、日本新聞協会協賛による第36回欧州新聞製作事情視察団 (CONPT-TOUR2011)の参加者募集を開始しました。

10月にオーストリアのウィーンで開催されるIFRA展をメインにオーストリアとイタリアの新聞社、新聞印刷工場を視察いたします。

多くの方々のご参加をお待ちしております。

- <日程> 10月9日(日) ~ 10月16日(日)(8日間)
- <費用> 526,000円
- <募集人員> 25名(最少催行人数)
- <訪問都市> ウィーン、ミラノ、トリノ、ヴェローナ
- <募集締切> 8月19日(金)
- ツアーの詳細ならびに募集要項の必要な方は、新聞懇話会事務局までお問い合わせ下さい。(TeL:03-3503-3829)

またツアーの詳細は、ホームページ(http://www.conpt.jp/)でご覧頂くことができます。

# CONPT-TOUR 2011 の見所

日本新聞協会 技術コンサルタント

三宅 順

今年のツアーは、オーストリア・ウィーンで開催されるIFRA Expo見学を核に、オーストリアと隣国イタリア北部にある新聞社2社(上流部門中心)と印刷工場2社(下流部門中心)を訪問、上流部門の関連メーカー1社からの特別な説明も受ける予定だ。

まず、今年のExpo (10日~12日開催)だが、6月末現在の状況では、まだ出展社・内容についての発表はない。詳細については、プレヴュー資料を入手次第、別途報告したい。例年、Expoには85以上の国から1万人以上の訪問者があるという。

今年のスローガンは、「PASSION FOR PUBLISHING」ということで、昨年のExpoから想像すると、新聞発行に限らず電子メディアを通じた情報発信に対する熱意が随所で感じられるものとなろう。併催で、第63回世界新聞大会(World Newspaper Congress)と第18回世界編集者フォーラム、その他さまざまな付随のイベントが同時に行われる。

Expo以外で技術に関連するイベントとしては、10日~11日開催のThe Power of Print-Focus Session at IFRA Expo (印刷における革新、リーン生産、カラー印刷品質の最適化など)、11日の第4回International E-reading & Tablet Conference (外部パートナーといかにエコシステムを構築するかなど、次世代システムへのタブレットの問題を取り上げる)、11日~12日のMedia Port 2011 (Expo 2011を補完する講義プログラム、各種パブリッシングの傾向について)などがある。また、WAN-IFRAには今年も昨年同様にCONPTツアーメンバー向けの特別講義を要請中だ。

次に、訪問各社およびメーカー特別説明会について触れたい。まずは上流部門、CMS (Contents Management System)ユーザーであるII Sole 24 Ore社(ミラノ)、La Stampa社 (トリノ)の2社を訪問する。そして、この2社にシステムを導入したCMSメーカーのEidosMedia社(本社はミラノ)からも詳しく話を聞く。

# <EidosMedia社のCMSに対する考え方と今後の方向性>

同社は、1999年に設立され、社内開発した ソフトウエア[Méthode]でよく知られてい る。このソフトは、どのようなタイプのコン テンツでも管理し、複数のチャンネル(印刷、 ウェブ、各種モバイル、その他)への同時発 信ができる総合プラットホームである。この 製品は、11カ国 40社で採用され1万人のユー ザーがいる。代表的な採用社は、ワシントン・ ポスト、フィガロ、フィナンシャル・タイム ズ、ウォールストリート・ジャーナルなどだ。 そして、このシステムを使用して75以上の日 刊紙と30のウェブサイト、約30の雑誌が発行 されている。同社のCMSやその周辺のシス テム開発の哲学、これからのCMSのあり方 など興味は尽きない。なお、同社はExpo期 間中に本社の移転が行われるそうで、本社へ の訪問はできないが展示会場にて特別に説明 会を開催してもらう。

#### <新聞以外の有料サービス提供>

日本でも最近、有料の電子新聞サービスの 広がりが見られるようになってきた。海外で は米ウォールストリート・ジャーナルが90年 代から既に有料のサービスを始め、最近では ニューヨーク・タイムズも一部のサービスを 有料化した。こうしたサービス展開には、ハ ード、ソフトの進展以外に、新聞広告収入の激減・新たな収入源の確保といった新聞社側の経済事情もあると考えられる。今回訪問する2社(Il Sole 24 Ore、La Stampa)でも同種のサービスが提供されている。中心システムのメーカーは、前者がAtex社、後者がEidosMedia社だ。新たな有料サービスの開始にあたり、どのような考え方でシステム導入や組織の再編にあたったのか、そして成果はどうなのか、じっくりと話を聞き、実際に社内のコンテンツ制作状況などを見学させてもらう予定だ。

最後に下流部門だが、前記2社の他にさら に新聞印刷、準商業印刷会社であるArena社 (ヴェローナ)、Herold Druck und Verlag社 (ウィーン)の生産現場を中心に訪ねる。

#### <カラー印刷品質管理への取り組み>

昨今の新聞各社の経済状況は日本に限ら ず、西欧においてもあまりよくない。他社と 区別化し広告を確保するための印刷品質の向 上・維持は欠かせない。そのための一つの取 り組みがINCQC(国際新聞カラー品質クラ ブ)メンバーとなることだ。メンバーである ことは、ある一定レベル以上の印刷品質を維 持していることを認定してもらうことでその 意義は大きい。昨年、このメンバーになった 印刷会社には今回訪問するLa Stampa (トリ ノ)、Arena (ヴェローナ)、Il Sole 24 Ore (ミ ラノ)が含まれている。なお、日本の新聞印 刷社では日刊スポーツ(大阪)、朝日プリンテ ック(東京)、静岡新聞などもメンバーとなっ た。日々どのような努力をしているのか、品 質向上を目指す印刷会社にとっては学ぶべき 点、ノウハウがありそうだ。

### <6×2輪転機、UVインキ乾燥装置、その他 自動化装置>

Herold Druck und Verlag社は新技術採用

ではリーダー的存在、工場内には見るべき新技術が多くある。中でも最近増設したマンローランドCOLORMAN autoprintシリーズのXXL機は6×2、同国初の採用だ。各種自動化装置も附属しているので自動化レベルは要注意だ。メーカーと共同開発した自動版替えロボット(APL)やUVインキ乾燥装置も一見の価値がある。Arena社では比較的新しい輪転機である、WIFAGのevolution 372が見られる。なお、以前、マンローランドによるWIFAG社買収交渉の話があったが、この交渉は決裂したようだ。

このほか、西欧の印刷工場では日本と違い、 準商業印刷への取り組みが進んでいる。サプリメント(本誌にインサートする付録など)の 作成から、実際にインサートし、発送される までの様子は壮観で圧倒される。日本とはまったく違う発送室作業の様子は見ていて楽しい。



今年開催されるウィーンのIFRA展会場 (2009年開催時)

# PRINT CHINA 2011 見聞録

有限会社メディアテクノス 代表取締役 (日本印刷技術協会 客員研究員)

井上 秋男

4月9日から13日までの5日間、中国広東省東莞市の広東現代国際展覧センターで「第二回中国国際印刷技術展示会PRINT CHINA 2011」がエコ、高効率、デジタル化をテーマに開催された。出かける前に業界関係者から「PRINT CHINAは北京国際印刷技術展示会のローカル展、あまり期待しない方がよい。但し、広東料理は美味しいので行く価値はある」と微妙な激励を受けた。行ってみると展示会は中国経済の活況を反映して、総出展面積は12万㎡、出展社は18の国と地域から1,261社、総来場者は延べ16万人規模で開催され、ローカル展どころか世界第2位の展示会に躍進した。

筆者は世界4大国際印刷機材展のドイツ drupa、米国PRINT、英国IPEX、日本IGAS や新聞製作技術展の米国ANPA/TEC、NEXPO、media xchangeや欧州のIFRA EXPO などを視察してきたが中国の展示会は初めてとなった。他の展示会とひと味違った楽しく発見の多い会場巡りとなり、視察記よりも見聞録として紹介したい。



大盛況の小森コーポレーションのブース

#### 展示会はフルオープン

初日、会場内の「新聞中心 | と書かれたオフ ィスに出向き、日本語の話せるスタッフに「取 材したいので記者証、プレスバッチを下さい」 と言ったところ、なぜ必要ですかと聞かれ、 「写真や出展者に取材するため」と答えると、 「記者証がなくても写真、取材も自由に出来 る |と強気な発言。「でも必要なので下さい | と弱気にお願いすると、漸く「媒体」と書かれ た記者証をゲットした。しかし、記者証は4 日間一度も役に立たず、各ブースでは「撮影 禁止 |の立て札もなく、そして拒否されるこ ともなく、中国の来場者と一緒に写真は撮り 放題となった。親切な出展者は筐体を開けて 中身を自慢げに見せてくれる、中には印刷機 の上から裏からも見せてくれたので理解が深 まった。また、名刺がなくてもカタログ、印 刷サンプルは自由に貰え、関係者は筆者の下 手な英語でも理解し、聞かなくても価格まで 教えてくれる。中国の展示会はフルオープン と実感したが、会場内に拳銃を持った軍人、 公安、警官が見回りをしているので、これも 中国の展示会と理解した。

#### 広東は印刷産業王国

料理は世界的に有名だが、なぜ、印刷展示会が広東で開催され、5日間で延べ16万人も来場するのか不思議に思い関係者に聞いたところ、「広東省には中国の印刷企業10万社弱のうち約2万社があり、総生産額の3分の1を占めている。また、香港・マカオに近く中国の印刷輸出額の8割を占め、毎年の成長率も10%を超えて中国最大の印刷産業王国。なお、中国ではカタログだけでは信用されず、実演し印刷サンプルを渡さないと買ってくれないので、展示会に多数来場する」と教えてくれた。

#### パッケージ印刷主流

展示会ではオフセット、デジタル印刷機とも「パッケージ印刷」の実演とサンプル展示が多くみられた。輸出関連と14億人の食料品、

生活用品、衣類などのパッケージ印刷が背景にあり、様々な用紙、サイズ、色に対応した印刷機と後加工機が数多く紹介された。中でもUV印刷機が厚紙、プラスチック、ラベルやシールなど多目的に印刷出来るためトレンドとなった。

#### 枚葉印刷機の売上げ拡大

メイン会場の3号館にはHEIDELBERG、 manroland、KBA、小森コーポレーション、 リョウビイマジクスなど世界的な有力ベンダ ーが「高付加価値、高生産性、エコ」対応の最 新枚葉印刷機を一堂に出展した。初日に各社 幹部による売上げ拡大を目指したオープニン グセレモニーが華々しく開催され賑わった。 小森コーポレーションブースには連日多数来 場し、実演時には立ち見が出るほど大盛況と なった。特に最新のハイブリッドUV印刷シ ステムはオゾンレスUVランプと高感度UV インキにより「即乾燥による生産性の向上、 パウダーレスによる品質向上、省エネ、低ラ ンニングコスト | などを紹介し、印刷サンプ ルは実演後すぐ無くなるなど高い評価となっ た。お会いした小森会長兼社長からは「少し ブースが狭かった。印刷企業幹部も多数来場 し、握手で手が痛くなった。売上げ目標は超 えそう |と嬉しいコメントが聞かれた。

リョウビイマジクスもLED-UV印刷システムと多彩な印刷サンプルを出展し注目を集めた。閉幕後、各出展社から好成果の発表が相次ぎ、KBAはトータル300台以上の予約注文、manrolandも枚葉印刷部門で印刷機と関連装置を300セット受注するなど、自国や地域での低迷を吹き飛ばす展開となった。

#### 新聞・商業オフセット輪転機低調

枚葉印刷機の絶好調に比べ新聞・商業オフセット輪転機は低調となり、出展は上海に製造工場のあるGOSS INTERNATIONALが新聞オフセット輪転機Magunamの実機展示のみとなり、毎時7万部の印刷能力と福建省の泉州晩報に今年後半に納入を紹介した。中国

で新聞オフセット輪転機のトップシェアを誇るmanrolandは、新聞ソリューションコーナーで「納入新聞社の印刷サンプル、昨年末に戦略提携したOce社との取り組み状況」などを紹介した。

その他の日本、欧州および中国企業からのオフセット輪転機の出展や紹介は少なかった。関係者に聞くと「中国でも広告の落ち込みにより新聞社は厳しい経営環境となり、新規発注は減少している。また、商業オフセット輪転機も多品種小ロット化やコスト削減により枚葉印刷機や中古オフセット輪転機の導入が進展」と回答があった。

#### デジタル印刷花盛り

今回の目的の一つに中国におけるデジタル 印刷の進展状況の把握がある。出展内容や関 係者に取材したところ、日米欧と同じく普及 期が到来していることが分かった。

方正電子は中国初の「ワイドフォーマット・ インクジェット印刷機EagleJet P5000」を初 出展し、新聞、書籍、教科書、試験問題、政 府公式文書、ダイレクトメール、小ロット印 刷などのアプリケーションを紹介した。 Kodakは「モノクロデジタルインクジエット 印刷機Prosper1000 Press」を初出展してデジ タルブックソリューションを実演した。HP はT300 Color Inkjet Web Pressを新聞、ブ ック、マニュアルなどの印刷サンプルとイン クジェットヘッドを展示し、香港の印刷サー ビス会社のアジア初の導入などを紹介した。 世界最大手のOceは親会社のキヤノンブース に出展し、一体型インクジェット印刷機 JetStream1000を実演し、新聞、ブック、カ タログ、マニュアルなど多彩なアプリケーシ ョンを紹介し注目を集めた。一方、トナー方 式ではキヤノン、富士フイルム、コニカミノ ルタ、HP、Oceから新製品の出展が相次ぎ、 高生産性、高品質、各種用紙対応を紹介し賑 わった。



方正の中国初のデジタル印刷機

#### CTPは普及加速期到来

わが国、欧米ではCTPは成熟期に入っているが、中国ではこれから普及加速期が到来する。背景として日米欧の有力ベンダーによるプレート、セッターの現地生産本格化により、コストが大幅な低下した。また、品質・生産性向上や製版コスト削減、エコ対応を実現するため導入が活発化し、富士フイルム、大日本スクリーン製造、Kodak、Agfaから最新のCTPセッター、プレート、ワークフロー、インキ削減ソフト、廃液削減装置などの出展が相次いだ。方正電子はじめ多くの中国企業も最新のセッター、プレートを出展し競演した。なお、商業印刷ではわが国と同じくサーマル、新聞印刷ではバイオレットタイプが主流となっている。

#### 後加工機の多種多様化

中国でも商業、新聞、出版、事務用、パッケージ、特殊、シール・ラベルなど印刷が拡大している。このため後加工機も多種多様化し、展示会では海外、中国ベンダーが数多く出展し見応えのある実演を行った。中でもホリゾンは中綴じ製本システムはじめ自動折り機、断裁機、丁合機とKodak製デジタル印刷機と連携してフォトブック製本システムを実演し注目を集めた。また、デジタル印刷機向け後加工機大手のHUNKELERはKodak、HP、JMDブースに用紙供給、断裁、折り機

を出展し高速性、高信頼性をPRした。

#### 日本ベンダー健闘

紹介した小森コーポレーション、リョウビイマジックス、富士フイルム、大日本スクリーン製造、コニカミノルタのほか、桜井グラフィックシステムズ、東洋インキ製造、三菱製紙、エプソンも中国企業と連携して最新技術や製品を出展し注目を集めた。また、解散したシノハラ、ハマダ印刷機械も中国企業ブースにて「日本式印刷機」として紹介され、わが国の高い印刷技術を示した。

#### 食は「麦当劳」にあり

展示会初日に日本方正メンバーから方正電子主催のパーティーに招かれ出席した。中国の宴会らしく広い会場に多数参加し広東料理を満喫した。しかし、蛙料理はさすがに食することが出来ず、隣の若い中国人メンバーに回したが食べられない様子。何が好きかと聞いたら「麦当劳(マクドナルド)」と嬉しそうに言う。そうか中国でも蛙がNGな人もいると、思わず握手して世界の共通語「good luck」を言って9月にわが国で開催されるIGAS2011での再会を約束した。



蛙料理も出たパーティ

以上、世界第2位に躍進し大盛況で閉幕したPRINT CHINA 2011を見聞録として紹介した。現地でサポート頂いた日本方正及びわが国からの出展社各位に誌上を借りて「多謝」を申し上げたい。

# 新局長に就任して

# 思考停止せずに…

河北新報社 システム局長

草刈 順

6月に編集局からシステム局に「完全移籍」しました。現職への異動発令は4月でしたが、「3・11大震災」で人事が一部凍結され、私の場合は「半解凍」状態で、編集局に



席を置いたまま、システム局業務も担当する 二股生活を2ヵ月過ごしました。両局は本社6 階フロアに同居しています。徐々に軸足を北 側の編集局から西側の当局に移し、ようやく 約60汽離れた本来の席に落ち着いたところで す。

#### \* \* \*

大震災からあっという間に時間が過ぎました。振り返ると、発生から数日間のことはあまりよく思い出せません。ただ、震災当日は床一面に散乱した資料類などを踏み分けて編集局とシステム局を行き来しながら、「翌日の新聞がどうすれば発行できるのか」だけを考えていたような気がします。

当時は編集局デスクの立場でした。システム局から8階マシンルームの組み版サーバーのディスク装置が横倒しになり、自社での紙面制作が不可能との報告があったのは、震災発生から間もなくのことです。災害協定を結んでいる新潟日報社の編集局と連絡を取り合い、紙面制作をお願いし、快諾してもらいました。幸運にも印刷センターは免震構造で被害がなかったため自社で印刷でき、当日の号外と翌日付朝刊の発行にこぎつけました。

新潟さんに足を向けて寝られません。中越 地震など多くの震災を経験しているからでし ょう。紙面制作だけではなく、災害時のさまざまな助言をいただきました。今回の大震災では、日ごろの連携・協力関係の重要性とともに、施設・機材・システムの事前の備えや、想定外の事態でも思考停止せずに対応する力が必要だと痛感させられました。

#### \* \* \*

今度は編集の職場を離れ、紙面制作について技術的にサポートし、工程やシステムを管理する役回りです。この10年余、局は違っても同じフロアでスポーツ部、整理部などの立場で紙面づくりを一緒にしてきたこともあり、このたびの異動は正直言って近所への引っ越しと気安く考えていたのですが、そうは甘くありませんでした。

悩ましいのがカタカナや略語の多さです。 局内の日誌や報告書に目を通すと、理解に苦しむカタカナ用語や、見慣れないアルファベットの2~4文字略語が並ぶときがあり、そこで思考が止まってしまいます。

その最たるものが5月に共同通信社であった新聞共有システムの「ベンダー」提案説明会でした。覚悟はしていましたが、各社の提案はいずれもカタカナ、略語だらけです。業界用語として当たり前なのでしょうが、もともと文科系のアナログ人間には、全く、ちんぷんかんぷん。つい先日までは原稿に訳の分からないカタカナ語が出てくると、「分かりやすい日本語で書け」と怒鳴っていた立場からすると、腹立たしいことこの上ありません。

しかし、そんなことを言ってばかりはいられません。「郷に入っては郷に従え」でしょうか。システム局にとっては新聞制作の次世代システムに移行する大事な1年であり、朝日新聞の受託印刷開始も迫っています。目前の業務を円滑に進めるには、このカタカナと略語の異文化をどう克服したらいいのか。あるいは、どう順応したらいいのか。目下、思案中です。そう、思考停止はまずいですから。

# 新局長に就任して

# 技術力を生かして

信濃毎日新聞社 技術局長

長田 実

東日本大震災から2カ 月が過ぎた5月中旬、技 術局長としての仕事が始 まった。信毎では新聞制 作システム「コスモスⅢ」 ハード更新の本番移行ま で2カ月を切っていた。



それから1カ月、システムの重要性をあらためて感じている。

被災地の新聞社の3.11以降の状況を聞き、 新聞を発行し続けることの重みを痛感した。 その紙面を見ると、再生への思いが伝わって くる。きっと被災者の心の支えになっている ことだろう。

\* \* \*

震災翌日の3月12日未明には、長野県でも 新潟県境の栄村で震度6強の地震があり、一 時は1700人が避難するなど、大きな被害が出 た。

長野本社のシステムや長野、塩尻の印刷工場には影響がなく、栄村住民の避難所にも新聞を届けることができたが、新聞づくりの拠点近くで大地震が起きたら…。その時も新聞を読者の元に届けられるよう、システム面で十分な備えをしていきたい。

私が入社した1977年は、鉛活字の時代。整理部員だった私の目の前で活版を組み上げた熟練の技は強く印象に残っている。その後コンピューターによる新聞制作が始まり、3世代目のコスモスⅢは2005年にスタートした。

編集局から技術局に移ったのは2年前。それまでは長い間、システムを利用して新聞をつくる側だった。しかし、立場は一転、今度

はシステムをつくる側だ。品質の高い紙面を めざす点は同じだが、これまでとは違う、技 術の視点が必要だ。システム側の大変さが実 感として分かってきた。

\* \* \*

信毎には、新聞づくりに技術力を生かしてきた伝統がある。最近も、08年に高精細の新AMスクリーンを実用化。09年には、読みやすいユニバーサルデザイン(UD)の基本文字を導入した。

このような、「読者のためになる技術」という目標を今後も大切にしていきたい。

震災後の3月下旬には、CMYインキのグレー成分をKインキに置き換え、インキを削減する技術「GCR」を、印刷局と協力して実用化した。品質とともに省エネやコスト削減が一層求められる。

気になるのは、新聞が若者たちに読まれないことだ。朝の食卓で新聞を広げる10代、20代はどれくらいいるだろうか。

震災、停電でテレビや携帯の情報が途絶える中、紙の新聞がよく読まれ、再認識された。 「紙」の魅力をどう高めていくか、そのために技術力をどう生かしていくか、大きな課題だ。 若者たちが新聞を読み、話の輪を広げてほしいものだが…。

\* \* \*

5月下旬、ハード更新の一環として、モニタープルーフの使用を編集局と技術局で開始した。組み上がったカラー紙面や修正した画像の確認を「紙」のカラープルーフから「画面」に切り替えた。局長着任後初めての新技術導入。緊張の日々だった。

新聞づくりを支える新しい技術の実用化は、技術者をはじめ、それに携わる人たちの情熱と創意工夫で実現してきた。

今回のハード更新も、準備に汗を流す人た ちの「ハート」が推進力だと思っている。

# 楽事万歳

## 桃山御陵

京都新聞社 印刷局長

坂井 重弥

執筆の依頼を頂いて「はて」何を書けばと困惑しきりだが、友人や親戚が京都に訪ねてきた時に、散歩がてら自宅から歩いて20分ほどの桃山御陵を案内することがあるのだが、これが結構喜ばれる。桃山御陵は名所旧跡に恵まれた京都のなかで観光客も少なく、地味な存在ではあるが、私のお気に入りなので、少し紹介しようと思う。

\* \* \*

初詣で日本一の参拝客を誇る東京の明治神宮を知らない人は無いと思う。もちろん祭神は明治天皇である。それでは明治天皇のお墓は?と問われて、即座に京都伏見の桃山御陵と答えられる人はなかなかの物知り、歴史通ではないかと思う。京都市民でも桃山御陵はよく知っている人は、思っているほど多くはないと感じている。

桃山御陵は伏見の南を流れる宇治川右岸の標高100元ほどの緑豊かな丘陵上に広大な敷地を占め、その中央南、旧伏見城の本丸跡に築造された東西127元、南北155元の上円下方墳の陵である。明治天皇は崩御の一月半後、京都に移送され、ここに埋葬された。

巨大古墳で有名な仁徳天皇陵などは、空から見ると前方後円墳独特の形やそれを囲む周豪が明瞭に確認できて、なるほどと感動するのだが、一方、これらの古墳を地平から見た時には、長年の年月の間に繁茂した樹木が墳丘を覆い、墳丘の形や葺き石で覆われている表面など本来の姿が見えず残念な気がする。しかし、この桃山御陵は百年ほどの時を経た

とはいえ、松の葉陰から、きれいに葺かれた 葺き石が見え、墳丘の形も見極めることがで き、古墳の築造当初のイメージを想像するこ とができていい。

\* \* \*

桃山御陵への参拝は色々なルートがあるが、近鉄桃山御陵前駅からなら、大手筋を東へ向かって緩やかな登り道を進むと、見事な杉並木が続く玉砂利の参道が見えてくる。その玉砂利道をさらに辿れば、西側から御陵に到るが、これはいわゆる表の参道ではない。先程の杉並木の玉砂利道を避け、南側の正面へ廻り込むルートが表の参道である。少し回り道になるが是非こちらから参拝願いたい。

正面入口右に掛かる宮内庁の「明治天皇伏見桃山陵」制札の少し先から、見上げるばかりの壁のような230段の大石段が始まる。不摂生者には地獄の苦行となるが、そこは話の種にと諦め、是非これを登り切って参拝し、達成感を味わって頂きたい。登り切った正面が桃山陵で、普段見慣れない空間と簡素で凛とした雰囲気がいい。桃山陵から東に下ると明治天皇の后だった昭憲皇太后の伏見桃山東陵もあるので寄って頂きたい。正月三ガ日には、特別に普段は入ることのできない玉垣内の二の鳥居手前まで入って参拝できる。

振り返って南を見渡せば、宇治川の流れの向こうに山城盆地が広がり、その先には奈良に続く丘陵が地平に浮かぶ。

\* \* \*

帰りは先程お話した玉砂利の参道を戻り、 途中から北へと右に折れて、林の中の道を辿り、平安京を開いた桓武天皇柏原陵を参拝す るのもいいだろう。

京都で行くあてが無く、時間を持て余して いるような折にでも、足を延ばして頂けたら 幸いである。

## 野球少年を教え、教えられ

(株)インテック

NSG事業部メディアソリューションセンター メディアソリューション営業部長

林 克美

土曜日の8時前、近くの小学校に向かいます。毎週土日は、少年野球チームで活動、今年は、小学1年生から4年生までの11人のチームの監督をしています。息子がチームに入ったことがきっかけでコーチとなり、息子が卒業しても私は留年し、6年目のシーズンを迎えています。

このチーム活動を通して、様々な出会いがあり、それが、楽しく、貴重な経験となっていて、卒業できないでおります。

まず、チームのコーチとの交流があります。コーチ仲間は、60代後半から30代後半まで30歳くらいの差があり、仕事も違います。個人商店、社長、不動産屋、税理士、〇△省など、様々な職業の方がいます。月に一度、「コーチ会議+飲み会」を開き、会議では、選手への接し方など真剣に話し合い、飲み会では、近所の情報から企業の話や製品開発の裏事情まで、様々な情報交換をします。飲み会自体、楽しいのですが、それ以上に、この仲間で話をする事が自分の足りないところを発見できる貴重な経験となっています。

#### \* \* \*

次に、子供たちとの交流です。

私には、実の息子は1人しかいませんが、チームの子供全員が私には息子、娘のように思っています。愚痴を言うようですが、低学年生に野球を教えるのは並大抵ではありません。野球を教えるような状況はほんの少しです。何かのきっかけで、キレる、反抗する、泣く、脱走…様々なことが起きます。その子の性格に応じて、叱る、甘えさせる、など様々な対処が必要になりますが、本当のところ、

何が正解かわかりません。だからこそ、一所 懸命にならざるを得ません。それ故、我が子 のように思うようになるのでしょう。平日は 仕事で自分の家族とも十分に接していないの に、週末はよその子供に一所懸命になる私に 家内はあきれています。

#### \* \* \*

高学年の子供になると、接し方が少し変わ ります。教える事に野球が加わります。学生 時代に野球経験があれば問題ないのですが、 相手は小学生なので、話し方、言葉を考えな いと理解してもらえません。更に、自分の子 供がいる場合は、野球経験がある人ほど、力 が入って感情的になります。よその子供との 良い関係とは逆に「親子の断絶」が発生しま す。私の場合も同じ傾向でしたが、あるとき、 息子の同級生の親コーチと話し合い、「自分 の息子のコーチはしないようにしよう」と、 私の息子は彼、彼の息子は私がコーチをする ことにしました。そうすると、息子たちは他 の子供と同じく親のプレッシャーを受けない で野球ができるようになり、私たちもチーム 全体を見る事ができました。そして何よりな のは、両家の親子の絆が切れずにすみました。

また、チームを卒業した子供たちとも関係は続いています。彼らは街で会うと、チームにいたときよりもきちんと挨拶をするようになります。その挨拶は、少し大人になったことを誇るようで、頼もしく感じます。時には、大袈裟ですが、挨拶だけで幸せを感じることがあります。

このような様々な経験が得られるからこそ、体力と家庭円満が続く限り、土曜日の8時前にグランドへ向かい続けるのでしょう。

#### \* \* \*

さて皆さん、私は、生来色白なのです。でも、一部の方から、ベトナム人と言われるほどになるのは、このような理由からです。以後、よろしくお願いいたします。

# 日独の高い技術融合

ボッシュ・レックスロスは印刷アプリケーションに対するサーボ・油圧・空圧・リニアガイドシステムの全てを供給できる世界で唯一のブランドです。

ボッシュ・レックスロスは世界36カ国に子会社、80カ国に販売ネットワークを持つグローバル企業としての強みを利用したサービス網を駆使し、輸出機械に対するサポートに於いても特化した企業です。

日本国内に於いても、印刷・工作機械・建設機械・FAオートメーションなどのアプリケーションに対し、油圧制御、FAモジュールなどの機器と共に新世代ドライブシステムとしてDrive safety機能を搭載した「IndraDriveシリーズ」やあらゆるレンジのモータを取り揃えた「IndraDvnシリーズ」、新

世代モーションコントローラ「IndraMotion シリーズ」などのサーボシステム製品を幅広 い分野で多くの採用実績を上げています。

私たちボッシュ・レックスロスは、幅広い品揃えの製品及びサービスを提供することで、開発及び生産から販売、アフターサービスに至るまで、お客様のあらゆるニーズに迅速かつ柔軟に対応します。お客様と協力しながら、それぞれの用途に適した完璧なソリューションをご提供します。当社の製品とコンサルティングに関する専門知識を融合することにより、技術的および経済的支出を最小限に抑えながらお客様に決定的な競争力を提供します。

ドイツ本国と日本の高い技術を融合させ、 高度なニーズに対応する企業、それがボッシュ・レックスロスです。

### ボッシュ・レックスロス(株)

# ケータイから宇宙まで

私どもNECエンジニアリングは、ICT (Information and Communication Technology)をコアとして、『プロダクト事業』『ソリューション事業』『基盤事業』を展開しております。今回は、この稿をお借りして3つの事業内容について紹介させていただきます。

#### ■プロダクト事業

各業界のニーズにお応えするソリューションを実現するために、得意分野である画像技術、無線技術、センサ技術などを生かした製品開発を行っています。新聞業界でおなじみのCTP装置をはじめ、IPネットワーク製品(ルータ、スイッチ)、TV/ラジオ用放送機器、宇宙関連機器など多数のプロダクトがあ

ります。

### ■ソリューション事業

弊社の保有する技術を組み合わせてお客様 のニーズに沿ったシステムを作り上げる事業 です。IPネットワークや物流、防災、衛星通 信などのシステム構築を手がけております。

#### ■基盤事業

SoC (System-on-a-chip)開発、メカトロニクス開発を中心に事業を展開しています。システムLSIの開発、携帯電話基地局などのインフラ系装置や携帯電話端末などの構造設計を行っております。

NECエンジニアリングは、以上3つの事業を中核とし、日々新しい技術への挑戦を続け、新聞業界をはじめ広く社会に貢献してまいりたいと考えております。

## NEC エンジニアリング(株)

# BRICs にも販売拠点

早いもので、CONPTに参加させていただいて10年以上が経ちました。

ミューラー・マルティニ社はスイスのゾーフィンゲンに本社を置くグループ会社で、スイス国内はもとよりドイツほか各国に生産工場を持っています。当社のような販売・サービス会社を全世界に持ち、最近ではBRICs各国にも販売の拠点を設けている国際的な企業です。

スイスは日本と同じく資源が少なく金融や薬品、食品、時計などの産業が強みですが、機械加工業もなかなか活発です。ミューラー社は世界で初めて中綴じ製本機械を作った会社であり、印刷加工の分野でお客様にとって

プロフェッショナルなビジネスパートナーとなるべく、1974年に設立されました。

取扱製品は、印刷・製本機械、新聞発送システム、プレスデリバリーシステム、最近ではデジタルブックオンデマンドなど幅広い分野の製品をご提供しています。

国内の新聞印刷工場に対しては、「ニューズグリップ」センターグリップキャリアと「アルファライナー」入紙機を納入しています。「ニューズグリップ」については、国内の新聞印刷工場に対して、多数の実績を上げさせて頂きました。今後の技術変化にも対応するべく、既存製品の見直し、開発を進めています。

今後も継続して優れた製品・サービスをお 客様に提供し、新聞印刷業界に貢献したいと 考えています。どうぞよろしくお願いします。

# ミューラー・マルテイニジャパン(株)

# イーグルズ・アイのご紹介

制作システムの開発に注力してきた方正にとっては新たな分野のソリューション紹介です。イーグルズアイは中国のインターネットサイト・口コミサイトを独自のクローリング技術でデータ収集・分析・統計を行い、日系企業が中国市場でご活躍できるための情報を提供させていただいているサービスです。

特に世界最大のインターネット人口を抱える中国において、口コミ情報は最も有用で生々しい情報の宝庫です。中国人は日本人に比べ口コミサイトに書き込む頻度・量ともに膨大で、その膨大なデータを統計することによりリアルな今の中国が見えてきます。

日本企業に関するデータを日々目にしますが、業種・業態・企業様の姿勢によって内容は様々です。共通して言えるのは褒めること

は日系だろうが他の国の企業だろうが、きっちり褒めていますし、単純な日系批判は非常に少なく、批判・不満には改善策まで具体的に提起されている傾向が多いようです。また、日本でも同じですが、内部リーク的な話は非常に緊急性を要する内容も多く見られます。その情報を収集・分析して日系のお客様の商品・サービスが『なぜ売れたのか?』『なぜ売れなかったのか?』『ライバルの動向は?』『今どういう評価を受けているのか?』等をリアルタイムで提示しています。

現在は特に、不動産・サービス業のデータが豊富でユーザーに多少偏りはありますが、 方正ならではのサービスとして今後力を入れていく予定です。中国進出を検討されている 企業に限らず、中国の最新事情の入手や、新聞社の記事コンテンツの一部としても活用できるのではないかと考えています。

## 方正(株)

#### 「震災禍を乗り越えよう! |

## 第37回定時総会開く

日本新聞製作技術懇話会は、5月27日午後4時から日本プレスセンターで平成23年度の定時総会を開いた。会員社32社から45名の方々が出席、1時間にわたり議題を進めた。

まず芝則之会長が挨拶に立ち、東日本大震 災の被害に遭われた関係各位にお見舞いを述 べるとともに、CONPTの3大催し、新年賀 詞交換会、CONPT-TOUR、JANPSを新聞社・ 協会といっしょに、しっかりやっていかなけ ればならないと表明。特に今秋のTOURは震 災の後遺症が続く心配があるが、会員社多数 の参加をお願いしたいと要望した。

来賓の弘中喜通新聞協会技術委員長は、今回の震災後に避難所で果たした新聞の役割、 壁新聞を発行した石巻日日新聞の例を引き 「これらは新聞の価値が見直される証左となった」と語った。

富田恵同編集制作部長からは、「新聞技術情報」が42年目に入って、担当する技術コンサルタントはこの4月までに全員新メンバーとなり、非常勤の態勢に変更したと報告。

芝会長を議長に選出、議題に入り22年度の活動について、評議員会は上坂義明氏、クラブ委員会は小股文雄氏、企画委員会は村松哲氏、広報委員会は辻裕史氏がそれぞれ報告した。事務局からは同事業報告、会計報告がなされ、これを受け会計監事有川直彦氏が報告通り間違いないと承認した。

続いて議事に移り、第1号議案「23年度予算」、第2号議案「同事業計画」、第3号議案「評議員選任」、第4号議案「懇話会会則改定」を拍手で了承した。23年度予算は会計の変更により総額2786万4000円と、前年度より1社当たり月額1万3000円の協会入金分が名目的に上乗せされている。事業計画は、10月9日から16日に、ウイーンのIFRA展にあわせCONPT-TOURを派遣する。また評議員人事は変更

なく、引き続き現体制を継続する。

#### JANPS準備年の会合を兼ね懇親会

JANPS2012を1年半後にひかえ、総会後の 懇親会は準備会合として同日午後5時から開 かれた。芝会長が、ぜひとも成功させるため、 ①技術展としての性格を維持する②会期を準 備2日間、展示3日間への短縮をめざす③活性 化のために4つの施策(新聞社の出展促進、海 外来場者誘致、展示の多様化、研究レベルの 技術の紹介)を基本方針に上げた。

懇話会検討チームの村松企画副委員長が詳細説明を行い、次回JANPSを機に新装した日本文、英文のCONPTホームページを紹介し、その後約1時間半にわたる歓談が終わり、藤間修一副会長の中締めで会合を終えた。

#### CONPT 日誌

5月27日(金)第37回定時総会並びに懇親会 (於日本プレスセンター9階、 来賓3名、会員社32社45名)

6月7日(火)評議員会(出席9名)

9日(木)クラブ委員会(出席9名)

14日(火)企画委員会(出席8名)

16日(木)広報委員会(出席5名)

16日(木) J A N P S 検討会(出席 5 名)

### 会員消息

#### ■所在地変更

\*日本ボールドウィン㈱(6月27日付) 〒108-0023 港区芝浦4-9-25 芝浦スクエアビル11階

#### ■很会

- \*日本ユニシス㈱(4月21日付)
- \*(株)メディアテクノロジージャパン (5月末付)

TEL番号、FAX番号は変更なし。

#### 新着資料

#### (国内)

- \*三菱重工業"graph" No.163
- \*富士フイルムグラフィックシステムズ"FG ひろば" Vol.148

#### (海外)

\*WAN-IFRA "IFRA Magazine" 5~6月号